

## 田中春夫先生の死を悼んで

思い出を語るには、あまりにも鮮明すぎる。野辺山で最後にお会いしたのは、つい先日のことである。新しく開発された鏡面測定法が実を結ぼうというとき、また再出発した学術会議の会員としてこれからのご活躍を期待していた矢先に、突如お亡くなりになってしまった。

はじめて田中先生にお目にかかったのは私が大学院生のときであったから、もうずいぶん古い話になる。修士論文のデータをいただきに豊川の空電研究所に伺ったときのことである。当時は新幹線がまだ走ってなかったので、精一杯早起きして東京をたってきたが、「遅いなあ、朝から待ってたんだぞ」といきなりやられてしまった。並はずれてせつかな方とはそのとき知る由もなかった私は、大変びっくりした。当時すでに空電研究所の教授を務められ、TOYOKAWAの田中として世界的にも名声が高かったし、髪がやや薄かったことも加わって、学生の私には大先生とうつつた。事実、その通り電波天文の大家であることに違いはなかったが、あとになって思うとまだ30後半になられたばかりの若手のバリバリであった。それにしても、陽気で気どるところがなく、またいい難いこともづけつけと仰しやる先生だなあというのが、はじめてお目にかかったときの印象であった。それ以来お亡くなりになるまで、電波天文の先輩として多くのご教示を下されたが、先生のご叱正や直言にはつねに研究に対する情熱と人に対する深い思いやりがこめられていた。戦略やかけ引きをあまり好まれず、いつも真正面から物事にとり組んでおられたが、先生の考え方や行動には、いつも学問・研究を進展させることが根底にあって、さすががしかった。決断はおそろしく迅速であったが、それでいて全体をよく見通しておられた。

電波天文に残された功績は数えあげればきりがながい。なかでも空電研究所時代になされた太陽電波のすばらしい観測的研究と、のちに東京天文台に移って宇宙電波の45m鏡と干渉計実現の原動力となられたことは、偉大な業績としていつまでも残るであろう。空電研究所では、早くから世界に先駆けてマイクロ波帯の格子型干渉計を創案・建設し、太陽電波を高い分解能で観測する道を拓き、のちに拡張して2次元干渉計として完成された。独創的な観測装置が乏しいわが国の天文学のなかで、ひときわ光り輝く業績である。

空電研究所から東京天文台へ移られてからは、宇宙電波観測装置の建設一筋に全力投球された。装置の技術的問題のほかにも、難問がつきつぎに降りかかってきて、ずいぶん神経をすり減らされたが、持ち前の決断力で事の解決に当らされた。着工の時期が迫ってなお地元との話し合いが暗礁にのりあげたときには、さすがにまいっ

ておられた。光田さん、太田さん（当時の東京天文台事務長、業務主任）と一緒に、しばしば私の官舎に飛び込んできてヤケ酒に憂さを晴らしておられた。酒の勢いで起る口論にハラハラしたが、翌日には三人ともケロリとして仕事に当る不思議なトリオであった。

東京天文台を退官されてからは、東洋大学で電気の講義を担当されるかわり、屋上に電波望遠鏡を作って鏡面測定法の開発に取り組んでおられた。ご自慢のアンテナが完成したのに野辺山の連中は誰もみにこないと大そうご不満のようであった。やや遅れて伺ったとき、みずからアンテナにかけ昇ってとてもうれしそうに説明して下さった。

太陽電波の将来については、いつも気にかけて励ましていただいた。行動力が乏しい私を、おそらく歯がゆい思いをしてみてくださいおられたのではなからうか。フレアの電波写真を撮るヘリオグラフは、われわれ太陽電波の研究者とともに、先生の悲願でもあった。今進めているヘリオグラフ計画の原形は、何年か前に先生が提案されたものである。

最後の最後まで研究と後輩の指導に全力を尽くし、天国からお迎えが来ないうちに急いで逝ってしまわれた。せめてこれからはゆっくり休んで下さい。（甲斐敬造）

## 悔いのない道を歩んだ科学者——田中さん

思いがけず田中春夫さんが亡くなった。何ということだろう。宇宙研は田中さんには永年その観測の内容、方針についていつも歯切れの良い議論を聞かせて戴くことでお世話になってきたものだった。この3月までは運営協議員会議の副議長をつとめて下さっていた。またこれからは学術会議の場でもわれわれの代弁者としてのお働きも期待していたところだった。何とも残念である。

こういったいわば公式のおつきあいの他に、田中さんとはかなり古くから御縁があった。追憶にふける事で御冥福を祈りたい。私の事になって恐縮だが、実は私は終戦後間もなく、阪大、後に大阪市大で手づくりの電波望遠鏡で太陽電波の観測をしていたことがある。何もない頃で、無知な事もあり色々苦勞もしたが、面白くもあった。その頃、小塩さん、高倉さん達とアンテナを地面にたてよこに（5行5列として考えたが）広く並べて干渉させるという考えをもった事がある。大阪市郊外私市にある市大の植物園を使おうかというところまでいったが、予算はないし、突飛な考えのような気もして、また何よりも宇宙線の研究の方が活発に忙しくなってきたこともあって、私は太陽電波をやめてしまった。

丁度その頃、実はれっきとした電波干渉計という考えがあって、空電研で大きな干渉計が作られるという話を聞いたのが田中さんのお名前を知ったはじめだったと思

う。その頃、電離層委員会かどこかで直接お目にかかっていたかもしれないが思い出せない。またその時、大きな観測をはじめられる事を羨しいと思ったような気がするがはっきり思い出さない。ずっと後、田中さんが何かに日本の電波天文の歴史を書かれるという事でちょっと昔のお話をした事がある。田中さんは5行5列の話覚えて居られて、私達の考えにはどこか甘いところがあって、あのままでは駄目だったと思うよといわれた。

電波天文は私にとっていわば初恋の相手である。ずっと折にふれ色々な方々に話を聞いたり、野辺山の太陽電波の干渉計を何度も訪ねたりしたが、シンパとして所属していた宇電懇だったかで電波の将来計画が議論されるようになって田中さんとは時々会うようになった。野辺山の新しい計画も自分の事のように興奮して及ばずながら声援を送ったものである。その頃だったか、私がX線天文の方で考えたすだれコリメータを、あれは心情的には昔の干渉計の続きなんだろうと聞かれたことがある。

田中さんが名古屋から東京に移られて間もなく、私は野辺山の建設現場を家内と日帰りで見物(?)に出かけようとした。丁度用事があるので車に乗せて行けと言われて一緒に行き、工事中の泥んこの中を歩き回ってすみからすみまで見せて戴いた。その時に、良い年をして名古屋からわざわざきて、しかも完成の時には定年なんて、あんたも馬鹿だけどういふのを何とか冥利につきるとでもいうのか、羨しいねと軽口をたたいた事だった。野辺山の開所式の時、田中さんの晴姿をどんな気持ちなのかと思って見ていたものである。

東洋大に移られてから、また本格的な一仕事をされた事を知って、つい先頃野辺山の共同利用委員会の時に、さすがだねと言ったら、ちょっと得意そうな顔をされたのが目に残っている。片想いだったかもしれないが、友を失ってしまったというどこかに穴があいてしまったような気持ちになっている。(小田 稔)

### なにをグズグズ・・・

田中先生はいつも正義と実行の人だった。そしてその正義をいつも先頭に立って、テキパキと、竹を割ったような正確さで進めていかれた。私たちがクヨクヨしていると、かならず、くちぐせの「なにをグズグズやってんだヨ」が飛び出す。だからと言って融通のきかない正義漢ではない。相手の話はよくきき、理あるいは非を認めると、「なるほど」と意見を変えるのもまた竹を割ったように潔いのである。すぐく真面目なくせに駄じゃれが好き、失敗談も多いおもしろい先生だった。

まず正義と実行。これはもう皆さんの目にも、そしてこの追悼号の他の先生の文にも満載と思うので簡単にすませよう。

先生は空電研究所在任当時から宇宙電波の計画の中心になって進めておられた。そして1976年東京天文台に移ってこられた。宇宙電波の計画はその頃は各方面の意見の調整に手間取っていた時期だった。いわばアアでもないコウでもない式にいつまでも続くやりとりは、先生にとって「なにをグズグズ・・・」であったと思うが、そのようななかでも先生の力で計画は進んでいった。全体の計画の陣頭に立つだけでなく、測量、土木建築、位相安定ケーブルの開発研究と製作なども直接担当して強度計算、温度係数の測定、ときには費用の概算見積まで、テキパキとこなされた。「地下に埋まっているものは全部ワシがやったものだ。」なんて酒の席で言っておられたことがあるが、どうして地上にも先生の作品はこと欠かない。

土木建築といえば、先生はいつも天文学でのその重要性を力説しておられた。望遠鏡は天文学にとっては単なる手段、という考えからすれば土木建築はそのまた道具に過ぎないということになるだろう。こんな考えがまだ根強く残っている日本の天文学のなかで、そしてこれから発展して行かなければならない日本の天文学において先生のこの考えは貴重なものだと思う。

目の前の正義をテキパキ実行して行くという先生の生きかたは、日常のこまかいところにも余すところなくおこなわれていた。階段を二段ずつ上がる、10秒でも遅刻すると叱られる、制限スピードを10キロ近くはオーバーしないと気に入らない(そこまでは絶対に捕まらないと先生は信じておられたようだ)などあげていけばきりが無い。人はそれをせうかちとか短気とか呼び、先生もそう自称しておられた。

先生のピンポンも短気決戦?型だった。うまく打ち込まれたり、失敗したりした時の声は凄かった。私も声では負けないほうであるが、ピンポンでだけは先生の声に負けていた。とても高い球でユックリ返球してくる選手と試合して返ってくる球が待ちきれず困ってしまった先生の試合振りは今でも思い出す。

東洋大学に移られて、それまでいつも大きなグループを率いられてきた諸々の責任から解放された(と言っても学術会議会員をはじめ多くの役職はついて廻ったが)先生は張り切ってとても楽しそうに研究しておられた。ホログラフィーの実験などで野辺山に来られた時も学生さんをひきつれて相変わらず足早に歩きまわっておられた。

そんな先生の姿をもう再び見ることはない。本当に、先生らしく、サッと行ってしまわれた。

田中先生、そちらの世はもういくら急いでも仕方ない世です。少しはノンビリする楽しみも開発してください。(森本 雅樹)